

## 7月第5週の礼拝 説教

■日 時：2022年7月31日（日）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「目を覚まし、身を慎んで」

■聖 書：テサロニケの信徒への手紙一 第5章1-11節（新約p378）

テサロニケの信徒への手紙一5章1節は、「兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。」と書き出されています。「その時と時期」とは、どのような時と時期のことでしょうか。聖書の元の言葉では、ギリシャ語で一般的な時を表す「クロノス」という言葉と、特別な約束された時を表す「カイロス」という言葉が用いられています。言い換えれば、私たちの置かれているこの世界には、私たち人間が日常的にとらえることのできるこの世の時の流れと、主なる神様のご支配される時の流れがある、ということ述べています。主なる神様のご支配される時の流れがこの世の時の流れに介入して来られる時、たとえば、それは主イエスの降誕という時でもあるのです。テサロニケの信徒への手紙一では、具体的には、その前の4章の後半の15節以下に語られていた、「主が来られる日」のことを指しています。十字架に架けられて死なれ、三日目に復活して天に昇られた主イエス・キリストは、合図の号令がかかり、大天使の声が聞こえて、神のラッパが鳴り響くとき、天から降って来られる、つまり、主の再臨が起こる日です。その日が来ることを聖書は他の箇所においても語っています。たとえば、コリントの信徒への手紙一15章23節から28節には、再臨においての主イエスの働きが次のように記されています。「ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、24次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。26最後の敵として、死が滅ぼされます。27「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。28すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。」つまり、その日には、今は隠されており、信仰の目によってしかわからない主イエスのご支配、権威が、主イエスの再臨において誰の目にも露わになり、明らかになるというのです。それによって、今のこの世は終わります。そしてその時には、既に死んだ者たちが復活し、またその時まで生き残っている者も共に、主イエスと出会うために引き上げられ、そしていつ

までも主と共にいるようになる、つまり、私たちの救いがそこで完成するのです。そして、テサロニケの信徒への手紙一 4 章 18 節は、「**ですから、今述べた言葉によって励まし合いなさい。**」と結んで、本日の箇所 5 章 1 節へと橋渡しをしているのです。

ところで、当時のテサロニケの教会に集う人々にとっても、現代の教会に集う人々にとっても、また今このようにして立川教会の礼拝に集っている私たちにとっても、そのような「主の日」がいつ来るのかということは大きな関心事です。ですから、当然、その当時のテサロニケの教会に集っていた人々は、この手紙の著者である使徒パウロに、その日について具体的に尋ねたことでしょう。それに対するパウロの答えは、5 章 1 節と 2 節に記されているように、「**兄弟たち、その時と時期についてあなたがたには書き記す必要はありません。2 盗人が夜やって来るように、主の日は来るということ、あなたがた自身よく知っているからです。**」というものでした。その言葉と一見矛盾するようですが、主イエスご自身はマタイによる福音書やマルコによる福音書のなかで、「**その日、その時は、だれも知らない。天使たちも子も知らない。父だけがご存じである。**」。とお語りになっています。つまり、これら二つの考え方をまとめてみるならば、「その日、その時がいつやって来るのかは誰も知らないけれども、盗人が突然夜やって来るように、必ず主の日がやって来る、ということは誰でも知っている」ということになります。3 節の「**人々が「無事だ。安全だ」と言っているそのやさきに、突然、破滅が襲うのです。ちょうど妊婦に産みの苦しみがやって来るのと同じで、決してそれから逃れられません。**」という御言葉は、まさに、私たちが今、具体的に体験しているいくつかの事柄に当てはまるのではないのでしょうか。

では、私たちは何をしてもその日から逃れられないならば仕方がない、と絶望してその現実飲み込まれてしまうのでしょうか。あるいは、今、連日取り上げられているカルト宗教のようなものに、救いを求めて全存在をかけて依存してしまうのでしょうか。そうではありません。主イエスはマルコによる福音書 13 章 33 節で「**気をつけて、目を覚ましていなさい。その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである。**」と語ります。そして、パウロも 4 節から 7 節で、「**しかし、兄弟たち、あなたがたは暗闇の中にはありません。ですから、主の日が、盗人のように突然あなたがたを襲うことはないのです。5 あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。6 従って、ほかの人々のように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいましょう。7 眠る者は夜眠り、酒に酔う者は夜酔います。**」と語ります。ここでは、暗闇や夜に属するものとしての「盗人や眠りや酒に酔うこと」と、光や昼に属するものとし

での「目を覚ましていることや身を慎んでいること」とが分かりやすく対比されています。しかし、私たちが自分自身の力で頑張るってそのように努めなければならないと勧められているのではないのです。大切なのは、5節に語られている「**あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです**」という御言葉に深く聴くことです。そうすれば、この世の様々な事柄に目を閉じて眠ってしまおうとすることではなく、しっかりと目を覚まして物事を見つめ、そして、いたずらに不安に陥ったり騒ぎ立てるのではなく、冷静に身を慎んで、一日一日を地に足を着けて過ごすということになるはず、とパウロは勧めているのではないのでしょうか。その冷静沈着さこそが、今この時にこそ、世界中で、そして、私たちの身近なところで、何よりも求められていると、私は思います。

さらに8節には、そのための具体的な対処法が示されています。「**しかし、わたしたちは昼に属していますから、信仰と愛を胸当てとして着け、救いの希望を兜としてかぶり、身を慎んでいきましょう**」とあります。テサロニケの信徒への手紙一は、書き出しの1章3節で「**あなたがたが信仰によって働き、愛のために労苦し、また、わたしたちの主イエス・キリストに対する、希望を持って忍耐していることを、わたしたちは絶えず父である神の御前で心に留めているのです。**」で語り出しています。そして、この8節では、信仰と愛は「胸当て」として、救いの希望は「兜」として、攻撃から身を守るための武具として具体的に描かれています。ある方は、これらのことを次のように語りました。「**光の子として、主イエスの再臨を待ち、それに備えて生きる信仰者の歩みは、戦いです。しかしそれは敵を攻め、攻撃して滅ぼすための戦いではなく、守りの戦いです。私たちに眠り込ませ、酔わせ、正気を失わせようとする様々な力の攻撃に私たちはさらされているのです。その攻撃に耐えて、目を覚ましており、正気であり続けるために、信仰と愛と希望とによって守りを固めることが必要なのです。そのような光の子、昼の子であり続けるようにと、パウロはテサロニケ教会の人々を勧め励ましているのです。**」この夏は、本当にその励ましが私たちに語られていることをしっかりと受け止め、地に足を付けて歩みましょう。

最近になって、世界がまた日本という国が、根底から揺り動かされるような出来事が続いています。そして、それらの出来事は、身近にいる家族や隣人をも疑ってかからなければならないような疑心暗鬼と憎しみと怒りの連鎖を広めています。そのような中での私たちの救いは、聖書の御言葉が力強く次のように語っていることです。テサロニケの信徒への手紙一5章9節から11節をご一緒に確認いたしましょう。「**神は、わたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるよう**

に定められたのです。10 主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが、目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。11 ですから、あなたがたは、現にそうしているように、励まし合い、お互いの向上に心がけなさい。」と記されています。テサロニケの信徒への手紙一の著者パウロは、主なる神が私たちを怒りに定めたのではないと力強く語ります。そうではなく、主イエス・キリストによる救いにあずかせていただけるように定められていると語るのです。そして、私たちにとって何よりの慰めは、たとえ私たちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるように定められている、と畳みかけるように福音の中心を語るのです。なぜなら、そのためにこそ、主イエス・キリストが私たちのために十字架にお架かりになって死なれたからである、と語ります。そのことこそが使徒パウロが確かにとらえた確信でした。そして、この2000年という時の流れを貫いて語り継がれてきた基督教の福音でもあるのです。そのような福音に触れた者は、以前の暗闇に戻って惰眠を貪ったり、怠惰で放縱な生活はしないはずだ、という使徒パウロの確信がそこにあります。私たちは、その真実の励ましと勧めに信頼して、励ましあいお互いの向上に心がけながら、共に歩んでまいりましょう。